



Title	源氏物語の本文と表現
Author(s)	中村, 一夫
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44760
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	中村 一夫
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 18307 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	源氏物語の本文と表現
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 蜂矢 真郷 助教授 荒木 浩

論文内容の要旨

『源氏物語』の表現に関する研究は、現在においては従来とは異なり新しい段階に入ったといっても過言ではない。諸本博搜の成果として『源氏物語大成』が上梓されて以降、『源氏物語』の注釈付きのテキストは青表紙本系統の大島本を用いることが常識となり、それに依拠しての作品論や語彙を含めた表現論が当然と考えられてきた。しかし、近年になって大島本の複製本が出版され、別本の公刊が続き、本文の集成や河内本の本文の詳細な研究があいつぐなど、本文への関心と、それらの資料を抜きにしてはもはやテキスト論は語れなくなった状況にある。とりわけ別本と称される諸本への考察の関心も高まり、研究成果も見られるようになった。そのような今日の史的展開のもとに本論文は位置し、別本の保坂本を中心にしながら、いわば先端的な研究成果の一つ方向を示しているといえる。

本論文は 400 字詰原稿用紙に換算するとおよそ 580 枚となり、全体は第一章「源氏物語別本の人物造形」、第二章「源氏物語別本の本文」、第三章「源氏物語のことばと方法」、第四章「源氏物語の語彙の表現価値」からなり、それぞれは三節で構成される。第一章では宇治十帖における待遇表現に焦点を当て、大島本と別本を用いながら、宇治の姫君たちと薫・匂宮とのかかわりを考察する。中君への待遇表現が、宇治から都に引き取られて後は高まっていくこと、中君だけに「ほそやぐ」のことばが用いられ、他の女性への「おもやす」とは語義の異なることなどを述べる。第二章では、若紫巻での待遇表現として、大島本では未知の人物には当初敬語がなく、身分が明らかになって後に用いられるものの、別本などでは、すでに既知の人物として初めから敬語が用いられるなど、たんなる本文の違いだけではなく、そこから作品としてどのように読みとれるのか、作品論への言及になっている。

第三章では、具体的に「心細し」、泣いた後の「のごふ」と「はらふ」、「涙」のことばをとりあげ、それぞれの作品における表現の意義を考察する。「心細し」のことばが、宇治においては八宮から大君、中君、浮舟へと継承されており、それは主人公の位置づけの変化によるとする。「涙」にしても、薫は浮舟には一度も泣かないこと、逆に匂宮は感情にまかせて泣くことなど、表現を通じて作品の主題に迫っていく。第四章では「おもふ」系として「おもひたまふ」「おぼす」「おぼしめす」の、それぞれの用法と意義、さらに「とぶらふ」と「とふ」の用法など、青表紙本と別本との違いを視点に置きながら詳細に論じていく。

論文審査の結果の要旨

『源氏物語』の別本を含めた本文や表現の考察は、従来とかく諸本の本文を列挙し、伝本間の違いを指摘するに終始しかねない研究領域である。それを申請者は、異文の読みを通じて作品の構造や人物論、さらには平安文学全体の視点から、用いられた場面での語彙や表現の意義づけをするなど、きわめて有意義な成果を得たと思う。宇治に住んでいた頃の中君と、匂宮と結婚して都へ移り住むようになって以降の待遇表現を分析し、敬意が高められている事実を指摘し、『源氏物語』における敬語が固定したものではなく、状況に応じて変化していく実態を明らかにする。若紫巻での光源氏かいま見の場面においても、初めて登場する尼君に対して敬語が用いられていないものの、やがて身分を知って敬語が付加されていく大島本の性格を位置づける。ところが、別本や河内本において、本文の書写者にとって尼君は未知の人物ではなく、作品を読んで素性を知っているだけに、初めから敬語を用いた表現をするなど、そこには後人の本文への改竄があったとする。そのほか、東京大学図書館本が保坂本と共通祖本から派生したこと、陽明文庫別本と本文の性格が異なることなど、書誌学的な考察もし、さらに語彙における諸本での意義づけ、そこから作品論への展開を試みる。宇治十帖が「心細し」のことばを基調とし、泣く表現の男性と女性の異なり、浮舟に対する薫と匂宮の「涙」の違い等、新見を随所に披瀝する。

このように内容的に意欲的な見解を述べるものの、本文の異同と書写者のかかわり、さまざまな表現や語彙と別本の位置づけなど、まだ残された課題も多い。ただ、新しい方法による本文と表現の研究は、学界に裨益するところが大きいものがある。このような次第で、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。